内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響 ——社会的アイデンティティ理論の観点から——

筑波大学 大石千歳¹・吉田富二雄

The effect of ingroup-outgroup comparison context on black sheep effect: An analysis from a social identity perspective
Chitose Oishi and Fujio Yoshida (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572)

Based on social identity theory (Tajfel, 1978), it is expected that black sheep effect occurs only in cases where ingroup members are compared with outgroup individuals. In study 1, 112 female student nurses were divided into two groups, and evaluated both outgroup and ingroup individuals (outgroup-ingroup condition), or ingroup members only (ingroup-only condition). Black sheep effect was found only in the outgroup-ingroup condition. Ingroup members in the condition were evaluated more extremely than those in the ingroup-only condition, and there was no significant difference between the evaluations of outgroup individuals in the outgroup-ingroup condition and ingroup members in the ingroup-only condition. The results confirmed the ingroup-outgroup comparison prediction. In study 2, in addition to rating four individuals, desirable or undesirable and ingroup or outgroup, 86 female student nurses were asked to indicate the importance of their own social identity. Black sheep effect was observed, with perception of ingroup homogeneity strengthening ingroup identification, thereby facilitating black sheep effect. These findings support Turner's self categorization theory (1982) as an explanation of the mechanism for black sheep effect.

Key words: ingroup-outgroup comparison, black sheep effect, social identity theory, self categorization theory, ingroup homogeneity perception.

集団心理学では、内集団の成員をひいきし、外集団の成員を差別する、内集団ひいきと呼ばれる現象が報告されてきた (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971). Tajfel et al. (1971) は、最小条件集団パラダイムを用いた実験によって、無意味な基準で即席に分けられた集団でも、内集団成員に多くの得点が分配されることを示した。得点を分配された者は内集団および外集団の匿名の成員であり、この実験において内集団ひいきを発生させたのは、被験者および報酬を分配される人物の集団成員性のみであった。この結果をふまえて、Tajfel (1978) は、人は所属集団をアイデンティティの源泉の一部とし、自分と同じ、あるいは違う集団の成員であるという事実 (集団成員性) のみで他者をひいきしたり差別したりするとした (社会的アイデンティティ理論: Social Identity Theory, 以下 SI 理論と略記)。さらに、最小条件集団パラダイムの実験では、報酬を分配される人物が匿名であることに象徴されるように、内集団成員であればだれに対してもひいきが起こるという前提が暗黙のうちに存在していた。その一方で、集団内の逸脱者が他の成員に仲間と

認められずに排除される“黒い羊効果” (black sheep effect: Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988) が示されている。黒い羊効果では、好ましくない内集団成員は内集団ひいきの対象とはならず、逆に差別されるのである。

黒い羊効果とは、内集団の好ましい成員が、同じ程度に好ましい外集団成員よりも高く評価され、内集団の好ましくない成員が、同じ程度に好ましくない外集団成員よりも低く評価されるという現象である。黒い羊効果に関する説明原理としては、SI 理論が有力である (Marques et al., 1988)。SI 理論では、人は自分の所属集団から自らのアイデンティティの一部を得ている。そのため、社会的アイデンティティ (以下 SI) を高揚することにより、自己概念の肯定性を保とうとする動機が存在するとされている。内集団に非常に劣った、あるいは逸脱した成員がいると、内集団から得る SI が脅かされることになり、自己概念をポジティブに保つことが難しくなる。したがって、劣った成員についてはきわめて低く評価して内集団から心理的に切り離す。一方、すぐれた成員は内集団全体の誇りとして高揚し、SI を肯定的に保つ黒い羊効果が発生すると予測される。自分の仲間であっても、あるいは仲間であるからこそ、劣っていればことさらに蔑視し排除する黒い羊効果は、組織や家族のやっかい者を“black sheep”と呼ぶ英語の慣用句から命名された。

¹ 本研究を行うにあたり、国立特殊教育総合研究所の東條吉邦先生、筑波大学の小玉正博先生、常盤大学の宮本聡介先生、武蔵野女子大学の久保田健市先生にご協力を頂きました。深く感謝致します。

このことは、このような現象が人間社会に深く根づいたものであることを示している。異質な者を排除するという意味で、黒い羊効果は組織における差別などの根底に存在する現象の一つと考えられる。

SI理論の立場からは、黒い羊効果の発生には内外集団の比較の文脈が必要といえる。なぜなら、外集団との比較は内集団のSIを顕在化させ、内集団のSIを高揚する動機を強める。そして、この高揚を妨げる劣った成員が切り捨てられ、排除される現象として黒い羊効果が発生すると考えられるからである。しかし、以下に挙げるように、黒い羊効果の先行研究において、内外集団の比較の文脈を実験デザインに組み込んだ研究は皆無に近い。

Marques et al. (1988) は、ベルギー人大学生（内集団）・北アフリカ人大学生（外集団）×好ましい・好ましくない成員の2×2の被験者間計画を用い、黒い羊効果の発生を示した。Branscombe, Wann, Noel, & Coleman (1993) では、カンザス大学の学生（被験者）をカンザス大学バスケットボールチームへの同一視の高低群に分け、カンザス大学学生新聞の記者を評定対象として、内集団・外集団（カンザス州出身のカンザス大生か、オクラホマ州出身のカンザス大生か）×記者の好ましき（ファンとしての熱心さの高低）×試合の勝敗（内集団への脅威の有無）による被験者間計画での実験が行われた。その結果、同一視高群でのみ、カンザス州出身の記者について好ましい者はより高く、好ましくない者はより低く評価された。Marques, Robalo, & Rocha (1992) も、自分の通う高校（内集団）・ライバル高校（外集団）×好ましい・好ましくない成員という実験デザインであり、内外集団の要因は被験者間要因であった。Marques & Yzerbyt (1988) では、法学科（内集団）・哲学科（外集団）×演説の上手・下手の要因のうち、実験1では内外集団を被験者内要因に、実験2では演説の上手・下手を被験者内要因に設定した。しかし内外集団の好ましい・好ましくない人物の計4人を、完全な被験者内計画で提示して黒い羊効果の発生を報告した研究はない。

上記の研究のうち特に前3者は、各被験者においては内外集団の比較の文脈がないため、SI理論以外の説明と比較しての、SI理論による説明の妥当性の確認が十分でなかったといえる。たとえば Marques et al. (1988) では、黒い羊効果に関するSI以外の説明として、内外集団のスキーマの複雑性の違いに基づく、複雑性-極端性仮説 (Linville, 1982) と態度の極性化説 (Millar & Tesser, 1986) を挙げている。両説とも、外集団成員に比べて、内集団成員についてはより多くの対人情報が入手できるため、そのスキーマは複雑な構造となるという前提を共有している。しかし複雑性-極端性仮説は黒い羊効果と逆の結果を予測し、態度の極性化説は黒い羊効果と一致する結果を予測す

る。Marques et al. (1988) では、この2説とSI理論を比較してSI理論の優越性を主張しているが、黒い羊効果に関して、スキーマの構造に基づく説明よりSI理論のほうが適切であることをさらに明確に示すには、内外集団の比較の文脈が存在する場合にのみ黒い羊効果が発生することを示せばよい。なぜなら、スキーマの複雑性に基づく説明では、内外集団の比較の文脈も、そこから発生するSI高揚動機も問題とされないためである。

したがって、本研究の研究1では、内外集団の比較の文脈が存在する場合にのみ黒い羊効果が生じ、比較の文脈がない場合には黒い羊効果が発生しないことを検証する。すなわち、外集団成員と内集団成員の両方を評定する条件（以下、内外集団条件）と、内集団成員のみを評定する条件（以下、内集団のみ条件）を設定し、以下の3点を検討する。(a)内外集団条件の内集団成員の評価では、外集団成員に比較して黒い羊効果が発生するであろう。これは、従来の黒い羊効果研究にあたる予測である。(b)内外集団条件の内集団成員の評価に関しては、外集団の存在により内集団の成員性が顕在化されるので、内集団のみ条件と比較して成員への評価が極端になる、すなわち黒い羊効果が発生するであろう。複雑性-極端性仮説と態度の極性化説では両条件ともに同じ内集団成員を評定するので、スキーマの複雑性は同じとなり、両条件に差はないと予測される。(c)内集団のみ条件の内集団成員と、内外集団条件の外集団成員の評価を比較すると、内集団成員のみを評価しただけでは内集団のSIは顕在化されないで、両条件の評価に差はないと予測される。ちなみに態度の極性化説では前者がより極端な評価になると予測される。複雑性-極端性仮説からは、外集団のほうがより極端な評価になると予測される。

ところで、Branscombe et al. (1993) では、同一視高群のみで黒い羊効果が発生しており、この結果はSI理論の見解に一致するとしながらも、内集団への同一視の程度が高いことがどのようなメカニズムによって黒い羊効果を発生させるのかは、十分には説明されていなかった。これに対して本研究では、自己カテゴリー化理論 (Self Categorization Theory; Turner (1982): 以下SC理論) に基づき、内集団への同一視の高さと内集団成員への評価の間に、内集団同質性認知の高まりが媒介要因として存在すると仮定する。

SI理論の発展形であるSC理論では、自己概念においては、集団成員性が重視される状況ではSIが、個人としての自己が重視される状況では個人的アイデンティティが顕著になるという。自己概念においてSIが顕在化すると、自分を含めた内集団の成員は内集団の特徴に従って認知され、内集団に特徴的な次元に関してだれでも同質で交換可能と認知される脱個人化 (depersonalization) が発生し、内集団同質性認知が

高まる。劣った内集団成員は、この内集団同質性認知を乱し内集団の評価を下げるものとして差別され、切り捨てられる。逆に、すぐれた内集団成員は内集団全体を高揚するとして高く評価されると予測される。また、被験者が強く同一視している内集団ほど、内集団成員性が顕在化されやすいため、内集団同質性認知、および黒い羊効果が大きくなると予測される。このような SC 理論に基づく黒い羊効果の説明原理を実証した研究は、現在のところ見当たらない。Doosje, Ellemers, & Spears (1995) は、高地位集団と低地位集団の成員を被験者とし、集団の地位の低さによって SI が脅威にさらされている低地位集団の成員で、かつ内集団への同一視が高い場合に、内集団同質性認知の程度が最も強いことを示した。この研究は、SI の顕在性が内集団同質性認知を媒介として、内集団成員への評価に影響を与え、黒い羊効果を発生させるという本研究と立場を同じくしている。しかしこの研究では、集団成員の評価については検討されていない。

以上により、本研究の研究 2 では、内集団への同一視の程度と内集団同質性認知が、内外集団成員の評価に及ぼす影響を検討する。

研究 1

目的

SI 理論の説明が妥当であれば、内外集団の比較の文脈がある場合には黒い羊効果が発生し、ない場合には黒い羊効果は発生しないと予測される。本研究では、SI 理論に基づき、内外集団の比較の文脈という観点から以下の仮説を設定する。

内外集団条件（比較の文脈がある）の場合、

仮説 1 内外集団条件の好ましい内集団成員は、好ましい外集団成員よりも高く評価されるであろう。

仮説 2 内外集団条件の好ましくない内集団成員は、好ましくない外集団成員よりも低く評価されるであろう。

内集団のみ条件（比較の文脈がない）と内外集団条件の内集団成員を比較する場合、

仮説 3 内外集団条件の好ましい内集団成員は、内集団のみ条件の好ましい内集団成員よりも高く評価されるであろう。

仮説 4 内外集団条件の好ましくない内集団成員は、内集団のみ条件の好ましくない内集団成員よりも低く評価されるであろう。

内集団のみ条件（比較の文脈がない）と内外集団条件の外集団成員を比較する場合、

仮説 5 内集団のみ条件の好ましい内集団成員は、好ましい外集団成員よりも高く評価されることはないであろう。

仮説 6 内集団のみ条件の好ましくない内集団成員

は、好ましくない外集団成員より低く評価されることはないであろう。

方法

実験デザイン 実験条件（内外集団条件・内集団のみ条件）×ターゲット人物の好ましき（好ましい・好ましくない）の 2 要因計画。

被験者 首都圏の看護短期大学女子学生 77 名および看護専門学校的女子学生 35 名の計 112 名（内外集団条件 52 名、内集団のみ条件 60 名）。

手続き 授業時間中に集合調査形式により実施された。内外集団条件では、ターゲット人物の評定に先立ち、これから外集団と内集団の好ましい・好ましくない人物を一人ずつ思い浮かべるように、との指示によって、内外集団の比較の文脈を発生させた。続いて被験者は、まず外集団の“好ましい大学生（女子）”“好ましくない大学生（女子）”を評定し、次に内集団の“好ましい看護学生”“好ましくない看護学生”を 20 個の形容詞 7 段階尺度上で評定した。形容詞については、井上・小林（1985）や林（1978）から、人物の好ましきに関連が強いと思われる形容詞 100 個を挙げ、うち 66 個を用いて予備調査を行い、好ましい看護学生と好ましくない看護学生（ $N=80$ ）、好ましい大学生と好ましくない大学生（ $N=41$ ）の双方を 1%水準で有意に弁別した形容詞 20 個を選択した。具体的には、面倒見のよい、のろまな、さわやかな、正義感の強い、つめたい、無責任な、不まじめな、やさしい、暗い、たくましい、穏やかな、辛抱強い、心のせまい、不安定な、意志の弱い、素直な、信頼できない、うそつきな、勇敢な、きちんとした、である。外集団として大学生を選んだ理由は、被験者である看護学生と年齢や学力などが類似していると思われるためであり、外集団を先に評定させることで、内集団をより強く意識させた。内集団のみ条件では、内集団の好ましい・好ましくない人物を思い浮かべるように、との指示に続いて、“好ましい看護学生”“好ましくない看護学生”を評定した。

従属変数 ターゲット人物に対する 20 個の形容詞尺度上の評定値を、好ましきが高いほど得点が高くなるように合計し（“好ましき得点”）、黒い羊効果の指標とした。

結果・考察

内外集団条件・内集団のみ条件ごとに、各ターゲット人物の好ましき得点の平均値を Table 1 に示した。

内外集団条件における内外集団成員の評価の比較好ましき得点を指標とし、ターゲット人物の好ましき（好ましい・好ましくない）×所属集団（内集団・外集団）の 2 要因分散分析を行った。その結果、所属集団の主効果は有意でなかったが（ $F(1, 51) = .51, ns$ ），

Table 1
好ましき得点の平均値 (SD) (研究 1)

	内外集団条件 (<i>N</i> = 52)	内集団のみ条件 (<i>N</i> = 60)
好ましい看護学生	124.42 (9.23)	118.15 (11.88)
好ましくない看護学生	50.75 (23.02)	58.90 (30.25)
好ましい大学生	116.98 (12.02)	—
好ましくない大学生	56.08 (25.18)	—

注) 理論的最小値・最大値 = 20.00—140.00.

好ましきの主効果は有意であった ($F(1, 51) = 336.42$, $p < .01$). また, 交互作用が有意であったため ($F(1, 51) = 16.74$, $p < .01$), 単純主効果検定を行った. 主な結果は以下のとおりである.

1. 好ましいターゲット人物の評価では, 所属集団の単純主効果が有意であった ($F(1, 51) = 35.03$, $p < .01$). 外集団成員に比べて内集団成員が有意に高く評価された.

2. 好ましくないターゲット人物の評価では, 所属集団の単純主効果に有意傾向がみられ ($F(1, 51) = 3.68$, $p < .10$), 外集団に比べて, 内集団成員のほうが低く評価される傾向が示された.

したがって, 内集団の好ましい成員はより高く, 好ましくない成員はより低く評価されることが示され, 仮説 1, 2 が支持された. すなわち, 黒い羊効果が確認された.

内集団のみ条件と内外集団条件の内集団成員の評価の比較 好ましき得点を指標とし, ターゲット人物の好ましき × 実験条件 (内外集団条件・内集団のみ条件) の 2 要因分散分析を行った. 所属集団の主効果は有意でなかったが ($F(1, 110) = .16$, *ns*), 好ましきの主効果が有意であった ($F(1, 110) = 455.65$, $p < .01$). また, 交互作用が有意であったため ($F(1, 110) = 5.36$, $p < .05$), 単純主効果検定を行った. 主な結果は以下のとおりである.

1. 好ましいターゲット人物の評価については, 実験条件の単純主効果が有意であり ($F(1, 110) = 9.52$, $p < .01$), 内外集団条件において好ましい内集団成員が有意に高く評価され, 仮説 3 が支持された.

2. 好ましくないターゲット人物の評価では, 両群の好ましき得点の平均値は内外集団条件でより低くなり, 仮説 4 と一致した方向性がみられたが, 単純主効果は有意ではなかった ($F(1, 110) = 2.51$, *ns*).

内集団のみ条件と外集団成員の評価の比較 内集団のみ条件と外集団成員の評価を比較し, 仮説 5, 6 の検討を行った. 好ましき得点を指標とし, ターゲット人物の好ましき × 所属集団 (外集団成員・内集団のみ内集団成員) による 2 要因分散分析を行った. その結果, 所属集団の主効果, および好ましきと所属集団

の交互作用は, ともに有意でなかった (順に $F(1, 110) = .60$, *ns*; $F(1, 110) = .07$, *ns*). 内外集団条件における外集団成員と, 内集団のみ条件における内集団成員への評価に有意差がみられなかった. したがって, 仮説 5, 6 が支持された.

内外集団の比較の文脈がある場合に黒い羊効果が発生したこと (仮説 1, 2), および比較の文脈がある場合とない場合とで内集団成員の評価を比較すると, 前者のほうが極端な評価となったことで (仮説 3, 4), 黒い羊効果における内外集団の比較の文脈の効果が示され, SI 理論による説明原理の妥当性が示された. また, 内集団のみ条件と外集団成員の評価に差がみられなかったことから (仮説 5, 6), SI 理論の立場がさらに支持されたといえる.

研究 2

目 的

研究 2 では, 内外集団の比較の文脈に加えて, 集団同一視および内集団同質性認知という SI に関連する指標を取り上げ, SI 理論および SC 理論による黒い羊効果の説明の妥当性を以下の 2 点に関して検証する.

1. 内外集団の比較の文脈に関しては, 研究 1 で検討した, 内外集団の両成員をイメージし比較させる教示の効果に加えて, 外集団を先, 内集団を後に提示した順序の効果が加わっている可能性が考えられる. そこで提示順序の要因を操作し, 教示の効果のみで黒い羊効果が生起するか, また順序の効果が加わることにによりさらに強く黒い羊効果が発生するかどうかを検討する.

2. 集団同一視の強い者ほど黒い羊効果が強くなると予測される. さらに, SC 理論によれば, 集団同一視が強い被験者は内集団同質性認知を強め, その結果黒い羊効果的な認知傾向を強めると予測される. すなわち, 集団同一視の強さと黒い羊効果の間には, 内集団同質性認知の高まりが媒介要因として存在しており, 内集団の逸脱者はこの同質性を乱す者として排除されると考えられる. 本研究ではこの点について検討する.

まず, 黒い羊効果に関しては, 以下の仮説が導かれる.

仮説 1 好ましい内集団成員は, 好ましい外集団成員よりも高く評価されるであろう.

仮説 2 好ましくない内集団成員は, 好ましくない外集団成員よりも低く評価されるであろう.

内外集団成員の提示順序に関しては, 以下の仮説が導かれる.

仮説 3a 黒い羊効果について提示順序が及ぼす効果が大きければ, 外-内条件のほうが内-外条件よりも, 仮説 1, 2 の傾向が強いであろう.

仮説 3b 黒い羊効果について提示順序が及ぼす効果が小さければ、仮説 1, 2 に関して外-内条件と内-外条件では差がみられないであろう。

集団同一視の程度において高群と低群に分けた場合、以下の仮説が導かれる。

仮説 4 集団同一視高群では、仮説 1, 2 の傾向が強いであろう。

仮説 5 集団同一視低群では、仮説 1, 2 の傾向がみられないであろう（みられてもごく弱いであろう）。

さらに、SI に関連する指標については、次のことが予測される。

仮説 6 集団同一視の程度が高い者ほど、内集団同質性認知の程度が強まるであろう。

仮説 7 内集団同質性認知の程度が高い者ほど、仮説 1, 2 の傾向が強まるであろう。

方 法

被験者 首都圏の看護専門学校的女子学生 86 名。

手続き 質問紙を用いた集合形式で実施された。被験者が看護学生なので内集団は看護学生であり、外集団は研究 1 と同様に女子大学生とした。

実験デザイン ターゲット人物の好ましき（好ましい・好ましくない）×所属集団（内集団・外集団）を被験者内要因とし、ターゲット人物の提示順（内-外条件・外-内条件）×被験者の集団同一視の程度（高群・低群）を被験者間要因とする 4 要因計画。

質問紙の内容 1. 教示：外-内条件、内-外条件ともに、これから内外集団の好ましい・好ましくない成員の評定を行う、という教示により内外集団成員の比較の文脈を顕在化させた。2. ターゲット人物の提示と評定：Marques et al. (1988) の方法に倣い、好ましい看護学生、好ましくない看護学生、好ましい大学生（女子）、好ましくない大学生（女子）の 4 種類のカテゴリーラベルを順に提示し、具体的な人物をイメージさせた。続いて、研究 1 と同じ 20 個の形容詞尺度上で、イメージした人物の評定させた。3. 内集団同質性認知の測定：Linville, Fischer, & Salovey (1989) のパーセンテージ推定法により、好ましき、看護婦らしきの各次元に関して、“全然ない—非常に”の 5 段階を設定し、各段階にあてはまる看護学生の割合を回答させた。4. 集団同一視の測定：Karasawa (1991) の identification scale（集団同一視スケール）日本語版の 7 項目を用いた。項目の内容は、“1. 典型的な看護学生という表現が自分に合うか、2. 典型的な看護学生と言われてよい気持ちがあるか、3. 本当に大切な友人は看護学校の中と外のどちらに多いか、4. 自分に影響を与えた人が看護学校にどのくらいいるか、5. 自分が看護学生だと実感するか、6. 自己紹介時に看護学生であると名乗るか、7. 看護学校にどの程度愛着を感じるか”であり、すべて 7 件法で

ある。

分析指標 従属変数：ターゲット人物の“好ましき得点”は研究 1 と同じである。

SI に関する諸指標：1. パーセンテージ推定法による 5 段階のうち、上位 2 段階に分類される成員が多いほど、内集団は高い水準において同質に認知されているといえる。そこで、各次元ごとに上位 2 段階に分類された成員の割合を合計し“同質性得点”とした²。

2. 集団同一視スケールの 7 項目の合計点を算出し、“集団同一視得点”とした³。

結果・考察

まず、集団同一視得点の平均値 $29.23 (SD=7.08)$ により被験者を集団同一視高群 ($N=40$)・低群 ($N=46$) の 2 群に分けた。そして、好ましき得点を指標とし、ターゲット人物の好ましき×所属集団×提示順序×集団同一視の高低による 4 要因分散分析を行った。好ましき得点の条件別平均値は Table 2 に示す。以下、仮説に即して主な結果を整理する。

黒い羊効果 上記の 4 要因分散分析において、好ましき×所属集団の交互作用が有意であったため ($F(1, 82)=15.71, p<.01$)、単純主効果検定を行った。

1. 好ましい人物について、所属集団の単純主効果が有意であった ($F(1, 82)=78.07, p<.01$)。すなわち、外集団成員と比較して、好ましい内集団成員はより高く評価されることが示され、仮説 1 が支持された。

2. 好ましくない人物についても、所属集団の単純主効果が有意であった ($F(1, 82)=6.27, p<.05$)。すなわち、外集団成員と比較して、好ましくない内集団成員はより低く評価され、仮説 2 が支持された。

内外集団成員の提示順序の効果 ターゲット人物の提示順序に関しては、主効果も、いずれの交互作用も有意ではなかった（主効果 $F(1, 82)=2.26, ns$ ；提示順序×同一視 $F(1, 82)=.00, ns$ ；提示順序×所属集団 $F(1, 82)=.07, ns$ ；提示順序×好ましき $F(1, 82)=.01, ns$ ；以下、提示順序の要因を含むすべての 2 次の交互

² この指標の作成方法は、Linville et al. (1989) とは異なる。Linville et al. (1989) の方法は単に集団が収束しているか否かを測り、どの段階に収束するかは問題にならない。しかし本研究では、内集団が自らに肯定的な水準で（好ましい、看護婦らしい、個性的な）水準で収束していることが重要である。したがって、上位 2 段階の成員の割合を合計し、内集団同質性認知の指標とした。

³ Karasawa (1991) では、7 項目による尺度の項目を ID-group と IDmember とに分けているが、本研究では、7 項目全体での α 係数が .75 と十分に高く、また、I-T 相関において特に低い項目はなかったため、7 項目全体の合成得点を算出し、“集団同一視得点”とした。

Table 2
提示順序別・集団同一視高位群別にみた好ましき得点の平均値 (SD) (研究2)

	内-外条件 (N=43)	外-内条件 (N=43)	集団同一視高群 (N=40)	低群 (N=46)	計 (N=86)
好ましい看護学生	117.84 (10.85)	119.58 (10.72)	121.78 (8.94)	116.04 (11.57)	118.71 (10.76)
好ましくない看護学生	55.35 (19.71)	59.74 (20.50)	54.80 (21.43)	59.94 (18.81)	57.55 (20.11)
好ましい大学生	107.79 (13.67)	111.49 (12.64)	112.53 (12.29)	107.13 (13.61)	109.64 (13.22)
好ましくない大学生	59.47 (19.02)	60.77 (16.00)	59.43 (19.06)	60.72 (16.18)	60.12 (17.48)

注) 理論的最小値・最大値=20.00—140.00.

作用, 3次の交互作用も有意ではなかった). よって, 仮説3aは支持されず, 仮説3bが支持された.

集団同一視と黒い羊効果 好ましき×所属集団×同一視の交互作用は有意ではなく ($F(1, 82)=.44$, ns), 好ましき×所属集団×提示順序×同一視の交互作用も有意でなかった ($F(1, 82)=1.11$, ns). しかし, 同一視高群・低群の各々について, 好ましき得点を指標とし, 好ましき×所属集団の2要因分散分析⁴を行ったところ, 同一視高群・低群ともに, 交互作用が有意であった (順に $F(1, 82)=10.47$, $p<.01$; $F(1, 82)=5.88$, $p<.05$). そこで単純主効果検定を行った. 結果は以下のとおりである.

1. 好ましい人物の評価では, 同一視高群, 低群ともに, 所属集団の単純主効果が有意であった (順に $F(1, 82)=37.77$, $p<.01$; $F(1, 82)=40.33$, $p<.01$). すなわち両群において, 好ましい内集団成員が外集団成員よりも高く評価された.

2. 好ましくない人物の評価では, 同一視高群において, 所属集団の単純主効果が有意であったが ($F(1, 82)=9.44$, $p<.01$), 同一視低群では有意ではなかった ($F(1, 82)=0.31$, ns). つまり同一視高群においてのみ, 外集団と比較して内集団の好ましくない人物がより低く評価された.

すなわち, 同一視高群では, 好ましい内集団成員はより高く, 好ましくない内集団成員はより低く評価され, 仮説4が支持された. 同一視低群では, 好ましい内集団成員はより高く評価されたが, 好ましくない内集団成員が低く評価されることはなかった. したがって, 仮説5は部分的に支持された.

集団同一視, 内集団同質性認知と内外集団成員の評価 仮説6, 7を検証するため, Figure 1に掲載したモデルによるパス解析を行った. SI 諸指標の平均値 (SD) は Figure 1のとおりである. 集団同一視得点

Figure 1. SI 関連諸指標と内外集団成員の評価に関するパス図. SI 諸指標の下に数字は平均値 (SD). 矢印横の数字は標準偏回帰係数.

は好ましき次元 ($\beta=.301$), 看護婦らしき次元 ($\beta=.314$) による内集団同質性認知の程度を高めた. したがって, 仮説6が支持された. また, 同質性得点 (好ましき次元) は, 好ましい看護学生への評価を高め ($\beta=.386$), 好ましくない看護学生 ($\beta=-.228$), 好ましくない大学生 ($\beta=-.277$) への評価を低めた. すなわち, 集団同一視が内集団同質性認知を高め, そのうち特に好ましき次元に関する内集団同質性認知の高さが, 内集団の好ましい成員への評価を上げ, 好ましくない成員への評価を下げる事が明らかになり, 仮説7が支持された.

総合考察

本研究では, 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響を検討した. すなわち, 研究1, 2を通じて, 内外集団の比較の文脈がある場合にのみ黒い羊効果が発生し, ない場合には発生しないことを示した.

⁴ 同一視の高低という要因は, 集団同一視得点の高低により, 後で被験者を2群に分類したものであり, あらかじめ実験的に操作した要因ではなかった. そこで本研究では, 4要因分散分析の枠内で (4要因分散分析の誤差項を使用して), 同一視高群, 低群別に2要因分散分析を行った.

また SI 理論および SC 理論の立場から、内集団への同一視 (identification) が黒い羊効果の発生にとって重要であることを明らかにした。とりわけ同一視の強さによって内集団同質性認知が高められることが、同一視と黒い羊効果を媒介する重要な要因であることを示した。以下に、内外集団の比較の文脈の効果と、集団同一視と内集団同質性認知の効果という 2 点について、本研究の結果を引きながら順に考察する。

まず第一に、内外集団の比較の文脈に関しては、従来の黒い羊効果研究ではさまざまな集団 (民族、所属する学校や学科など) を用いて実験を行ってきたが、そのほとんどは被験者は内集団成員と外集団成員を単独に評価し、そこには内外集団の比較の文脈は存在していなかった。しかし SI 理論によれば、外集団成員との比較は、内集団の SI を顕在化する重要な要因である。

研究 1 では、内外集団の比較の文脈を操作し、比較の文脈がある場合には黒い羊効果が生じることが示された (仮説 1, 2)。また、同じ内集団成員の評価についても、比較の文脈がある場合とない場合では評価が異なり、前者のほうが評価が極端になった (仮説 3, 4)。加えて、内集団のみ条件と外集団の比較では黒い羊効果が生じないこと (仮説 5, 6) が明らかになった。これらの結果は比較の文脈の重要性を明確に示し、SI 理論による黒い羊効果の説明の妥当性を立証したものと見える。また仮説 5, 6 に関して、SI 理論ではなくスキーマの複雑性に関する二つの説をあてはめてみると、複雑性-極端性仮説からは、内集団成員の評価は中庸になると予測され、態度の極性化説からは、内集団成員の評価は極端になると予測された。しかし仮説 5, 6 に関する結果はどちらの予測とも一致しなかったのである。

研究 2 では、内外集団の比較の文脈に関して、内集団と外集団の両方の成員をイメージし、評定するという内容の教示の効果が大きく、この教示があれば内外集団成員の提示順序の効果はみられないことが示された (仮説 3a, 3b)。

内外集団の比較の文脈の有無や強さ、という観点から研究 1 と研究 2 の結果をまとめると、以下ようになる。内外集団の比較の文脈の操作は (a) 内外集団の成員をイメージさせる教示を行う、(b) 外集団成員を評定してから内集団成員を評定するという順序、という二つの条件に分けることができる。研究 2 の結果からは、分散分析において提示順序の主効果およびこの要因を含む交互作用は有意ではなかったので、(a) の条件の効果が強く、(b) の条件の効果は弱かったといえる。研究 1 の内外集団条件、および研究 2 の外-内条件は (a)、(b) の条件をともに満たし、研究 2 の内-外条件は (a) のみを満たし、研究 1 の内集団のみ条件は (a) も (b) も満たさない、という設定になっていた。

内外集団の比較の文脈の効果は、理論的には (a)、(b) の条件を両方満たしているときに最も強いと考えられた。しかし今回は、提示順序の効果はみられず、研究 1 の内外集団条件、研究 2 の外-内条件と内-外条件のいずれでも、黒い羊効果が発生したのである。

しかし、研究 1 の仮説 4 では、好ましくない内集団成員に関して、仮説に一致した方向性がみられたが有意ではなかった。その理由として、好ましい内集団成員に比べて好ましくない内集団成員への評価は、ばらつき (分散) が大きかったという点が指摘される。これは、好ましい対象に比べて好ましくない対象の認知的表象は複雑な構造になるという positive-negative asymmetry (Peeters & Czapinski, 1990: 以下 PNA) によると考えられる。好ましくない人物の認知的表象が複雑であるということは、個々人により思い浮かべる人物が多様であることを意味する。Table 1 にあるように、内外集団条件と内集団のみ条件を比較すると、好ましい内集団成員の評価では評価差は 6.27 で、単純主効果が有意であった (仮説 3)。好ましくない内集団成員の評価では、内外集団条件のほうが評価は 8.15 も低いにもかかわらず、その差は有意ではなかった (仮説 4)。このように平均値には大きな差がみられても、PNA の影響により分散が大きいため、実験条件の単純主効果が有意にならなかったと考えられる。

外集団と内集団のみ条件の比較において黒い羊効果が発生しなかったという、研究 1 の仮説 5, 6 に関する結果は、内集団・外集団×好ましい・好ましくないという 2 要因被験者間計画で黒い羊効果を検証した Marques et al. (1988) の結果とは一致しない。その理由としては、両研究が用いた社会集団の違いが考えられる。Marques et al. (1988) では、ヨーロッパにおいてベルギー人と北アフリカ人という民族集団を用いているため、どちらかを単独で提示された場合でも、暗黙のうちに他の民族や国家の存在が意識されたと考えられる。日本ではヨーロッパほどには人種や民族の構成が複雑でないため、人種・民族が明確な社会的カテゴリーとして意識されることは少ない。本研究ではその代わりに職業を社会的カテゴリーとして選び、職業に関連した集団として、看護学生を被験者とした。それでも、民族のカテゴリーほどは集団成員性が意識されず、内外集団の比較の文脈がないまま内集団成員のみを評定した本研究では、SI が顕在化されなかったと考えられる。

第二に、集団同一視と内集団同質性認知については、研究 2 において、集団同一視の程度が高いほうが黒い羊効果の発生が顕著であることが示された (仮説 4, 5)。さらに、Figure 1 のパス図から明らかなように、集団同一視は、内集団同質性認知を経由して、黒い羊効果を強める影響を与えていた (仮説 6, 7)。す

なわち、集団同一視は、内集団同質性認知を強め、その内集団同質性認知は、好ましい内集団成員（看護学生）をより高く、逆に好ましくない看護学生をより低く評価させていた。これらは、SC理論における“内集団への同一視が内集団同質性認知を起し、その結果黒い羊効果が発生する”というメカニズムの妥当性を支持するものであるといえる。研究2で、集団同一視が内集団同質性認知を媒介として内集団成員の評価に影響を与え、黒い羊効果を発生させることを示したことは、黒い羊効果に関して従来よりも一歩進んだ説明となっている。

Doosje et al. (1995) は、内集団への同一視が強く内集団のSIが脅かされた場合に、内集団同質性認知が最も強いという結果を報告しているが、本研究においても、集団同一視が内集団同質性認知を高め、内集団の好ましくない人物がより低く評価されるという一致した結果が得られた。これらの結果は黒い羊効果を“内集団同質性を維持するため、劣った成員を排除するアイデンティティ管理方略”としてとらえることの有効性を示唆するものであり、今後の研究においても、アイデンティティ管理方略の一つとしての黒い羊効果と、内外集団の同質性認知との関連を検討してゆくことが重要であろう。

また、Branscombe et al. (1993) は、黒い羊効果の研究に内集団への同一視の要因を導入した数少ない研究として、高く評価されている。しかしながらこの研究では、集団同一視の程度の高さがどのようにして黒い羊効果に結びつくのか明らかではない。また内集団と外集団の設定が不明確であるという方法的な問題点も指摘される。Branscombe et al. (1993) では、評定ターゲット人物としては、オクラホマ州出身のカンザス大学学生新聞記者を外集団成員としている。ここから、被験者（内集団成員）はカンザス州出身のカンザス大学学生になるはずであるが、“方法”の記述には、被験者については心理学の授業に参加したカンザス大学学生とあるので、出身州に関する記述はない。

しかしそれ以上に、以下の根本的な問題点が指摘される。Marques et al. (1988) が提示した黒い羊効果は、内集団と外集団の間に直接的な利害関係がない場面を想定していたが、Branscombe et al. (1993) では、内外集団の間に勝負を争うという、ゼロサム型の利害関係がある場合を扱っている。Branscombe et al. (1993) の実験結果においては、内集団の不誠実なファン（学生新聞の記者）は、強いチームの味方でいたいと表明し、敗れた味方のチームを見捨てて相手チームのファンになる可能性を示したため、内集団の利益を損なう存在（裏切り者）とみなされ蔑視されたと考えられる。このように、この実験結果は、やはり内外集団の利害関係の観点から説明できるのである。

Marques, Abrams, Paez, & Martinez-Taboada (1998) でも、内集団の逸脱者は、内集団の規範から逸脱し外集団の規範に同調することで、外集団の規範のほうによりよいことを示す役割を果たしている。そのため、内集団の逸脱者は内集団の裏切り者となり、Branscombe et al. (1993) と同様の問題が指摘される。

それに対して本研究は、内外集団に利害関係を含まない集団を設定し、上記の問題点を含まない形でSI理論およびSC理論の説明原理の妥当性を示したといえよう。

引用文献

- Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J. G., & Coleman, J. 1993 In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 381-388.
- Doosje, B., Ellemers, N., & Spears, R. 1995 Perceived intragroup variability as a function of group status and identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 410-436.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, **25**, 233-247.
- (Hayashi, F. 1978 The fundamental dimensions of interpersonal cognitive structure. *Bulletin of the Faculty of Education: The Department of Educational Psychology*, **25**, 233-247.)
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理研究, **33**, 253-260.
- (Inoue, M., & Kobayashi, T. 1985 The research domain and scale construction of adjective-pairs in a semantic differential method in Japan. *Japanese Journal of Education at Psychology*, **33**, 253-260.)
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.
- Linville, P. W. 1982 The complexity-extremity effect and age-based stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 193-211.
- Linville, P. W., Fischer, P., & Salovey, G. W. 1989 Perceived distributions of the characteristics of in-group and out-group members: Empirical evidence and a computer simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 165-188.
- Marques, J. M., & Yzerbyt, V. Y. 1988 The black sheep effect: Judgmental extremity towards ingroup members in inter- and intra-group situations. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 287-292.
- Marques, J. M., Robalo, E. M., & Rocha, S. A. 1992 Ingroup bias and the 'black sheep' effect: Assessing the impact of social identification and perceived variability on group judgements. *European Journal*

- of *Social Psychology*, **22**, 331-352.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. 1988 The 'black sheep' effect: Extremity of judgements towards in-group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 1-16.
- Marques, J. M., Abrams, D., Paez, D., & Martinez-Taboada, C. 1998 The role of categorization and in-group norms in judgments of groups and their members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 976-988.
- Millar, M. G., & Tesser, A. 1986 Thought-induced attitude change: The effects of schema structure and commitment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 259-269.
- Peeters, G., & Czapinski, J. 1990 Positive-negative asymmetry in evaluations: The discrimination between affective and informational negativity effects. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol. 1. Chichester: John Wiley and Sons. Pp. 33-60.
- Tajfel, H. (Ed.) 1978 *Differentiation between social groups*. London: Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-177.
- Turner, J. C. 1982 Towards a cognitive redefinition of the social group. In H. Tajfel (Ed.), *Social identity and intergroup relations*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 15-36.
- 1997. 12. 22 受稿, 2000. 7. 1 受理——